私の履歴書

岸 恵子 ⑰

挙式

1957年5月4日。パリ北郊30キロにあるヴァルモンドワという谷間の村役場での結婚式には女優ダニエル・ダリューのほか川端康成先生ら多くの著名人が集まった。

イヴ・シャンピ側の仲人は川端先生と親しいフランスの文豪で医師でもあるジョルジュ・デュアメルさん。彼の大邸宅がこの村にあった。

デュアメル家の3兄弟のうち2人が夫のイヴと同じ医大出身。披露宴は親友でもある次男ジャンの屋敷で三日三晩、華やかに続いた。広い庭の随所に火が焚かれ、花火が打ち上げられた。村中の人を招待し、シャンパン300本を空けてのお祭り騒ぎとなった。このにぎわいは長いこと語り草になっていたという。

私は睡眠時間ゼロも珍しくない掛け持ち撮影が続く状態から別世界に飛び込み、心は幸せに満たされたが、一方で体に異常も覚えていた。ヴァルモンドワでの3日目は寒い日だった。歯の根が合わないほどの寒さに全身が震えた。

シャンパン300本 お祭り騒ぎ

新婚旅行先で盲腸 心ない仕打ち

祝い客には当然のことながら大勢の医師がいた。夫をはじめみんなが「大決心した後の長旅で疲れ果て、風邪を引いたのだろう」と思っていた。湯たんぽを抱えて寝た私は翌日には元気になり、みんなに見送られて3ヵ月という長い新婚旅行に発った。

陸路でイタリアまで行き、ヴェニスから船でアドリア海を回ってギリシャの遺跡巡りをする計画である。「日本とは異なる国々や文化を見せたい」という約束を実行するための壮大なプランだった。

南仏へ走る国道7号線から見る景色は素晴らしく、歓声を上げていた私は次第に辺りが暗くかすんで体に重苦しい鈍痛を覚えた。そして動くことさえできなくなった。「風邪ではない。盲腸かもしれない」と夫が即断した。

「一度、盲腸で苦しんだの。撮影中だったので手術しないで散らせたことがある」

「それを知らないで湯たんぽとは……」

その日は5月8日。フランスの戦勝記念日で全国の病院は閉鎖。パリに次ぐ大都市のリヨンまで行き、非常勤医師が手早く手術をしてくれた。不幸中の幸いは彼が執刀の名医だったこと。私は丘の上にある尼僧院の病室に寝かされ、麻酔が効き、ベッドにぐっちゃりと伸びていた。意識が戻っていない私は騒然とした病室の雰囲気に何かが起きたのだとぼんやり感じた。

それはとんでもないことだった。1、2分間ほど席を外した看護師でもある尼僧が病室に戻った時、若い男がベッドにのしかかり、手術直後の私の額に乗せてあった氷嚢を外してフラッシュを焚き、写真を撮っていたのだ。尼僧に続いて夫や執刀医も後を追ったが、若いパパラッチはすばしこく逃げ切ったという。

イヴ・シャンピとの結婚式

間もなく日本の新聞に私がベッドにぐったりと寝ている惨めな写真が載った。「これが岸恵子のフランス到着後の姿である」。意地悪なコメントにあぜんとした。

パリに住む高田美という女性カメラマンが結婚式の一部始終を撮り、日本に送っていた。その他多くのフランス人カメラマンが送った写真は華やかな花火の下、たき火を囲む友人たちの真ん中にいる夫と私の姿だった。

マスコミはそれら幸せな私よりも、萎えきってベッドに横たわる私を選んだのだ。

（何たること！）

でもこんな些事で私の日本を恨みはしないとも思った。

（女優）

掲載日 2020年5月18日 日本経済新聞 朝刊 24ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。